

「令和3年度第1回高知県日本語教育推進会議」 議事概要

日時：令和3年4月27日（火）10：00～12：00

場所：共済会館3階「桜」

出席者：別紙

1 挨拶（文化生活スポーツ部長）

2 会長、副会長の選出について

○会長：高知大学人文社会科学部 学部長 中川 香代

副会長：（公財）高知県国際交流協会 理事・事務局長 勝賀瀬 淳

委員の互選により、両名で選任

3 議題

(1) 日本語教育の推進について

○事務局から資料3により説明

(2) 日本語教育に関する各委員の取組等について

○事務局から資料4により説明

○各委員の取組や日本語教育に関する意見を紹介

4 その他

○次回スケジュールについて

「日本語教育に関する各委員の取組等について」【各委員の発言の概要】

○各委員の取組や日本語教育に関する意見

（中川委員）

高知県は、まだまだ産業、特に農林漁業や製造業、介護の分野で人手不足が深刻化しており外国人労働者が年々増加。特にベトナムからの技能実習生が増えているという状況がある。こういう方たちに地域社会の一員として定着してもらおうと同時に、これからは特定技能に移行する労働者の方等、移動が自由になる。そうすると、やはり賃金の良い都会のほうに移っていくということが考えられる。ただ一方で、いろいろな働く現場でヒアリングをしたところ、高知がとても住みやすく、ずっと住み続けたいと希望している労働者の方もいるということも聞いている。現在は、SNS等で口コミというのがどんどん世界中に伝わるので、高知県が暮らしやすくてとてもいい所であるということが伝わっていけばと考えている。生活者としていかに楽しい時間を過ごせるか、それには、まず言葉。我々市民と交流していくという点においては、やはり日本語を話す能力があるということが非常に重要だし、職場で彼らの能力を十分いかすには、やはり日本語で使用者側と話ができるというのはとても大事だと思う。日本語教育というのが全ての外国人労働者、あるいは留

学生に行き渡って、高知県での生活は楽しいという関係を作りたいという風に考える。

(古木委員)

これまで日本語に関する取組としては、県と連携しながら事業所に日本語教師を派遣するという日本語支援事業。これで約 100 名以上の技能実習生に日本語支援を行ってきたり、昨年は龍馬学園さんとの連携により、技能実習生の入国後講習の実態調査やアクションプランを作った。そのほか、コロナ禍ということもありベトナム、首都ハノイに対してオンライン日本語教室を開催して、これも龍馬学園との連携で、延べ 500 名以上の若者たちに日本語教育をしてきた。

課題としては、外国人技能実習生の滞在期間の長期化に伴い日本語習得の必要性が増しているという目下の必要性と、高知県が今後、外国人と共生していくに当たって、何も工夫をしなければ高知県は選んでもらえないという危機感を我々は持っている。そうした工夫が幾つかあるなかの大事な一つが日本語教育だと考えている。

(光井委員)

介護の外国人材を受け入れるに当たって、当初は非常にコミュニケーションのことを気にされてた方が多かった。それは全く逆で、建設とかのように物を相手にするのではなくて、人を相手にしているがために、14 名入って来た技能実習生のうち 7 名がもう N3 合格し、次、N2 に挑戦する。日常的に日本語を会話でしゃべるがゆえに、非常にスムーズに日本語の学習ができています。あとは技能実習生の日本語学習のための、県の補助金も活用している。

有り難いことに、受入れをしていただいている法人が非常に技能実習生を可愛がってくださり、LINE で高知にいる技能実習生が高知はいいよということで、もう皆さんが高知のほうを向いていただいている。

賃金に関しては、例えば関東の県と比べて手取りが少なくならないように皆さんにお願いしている。

(吉川委員)

20 年以上、フィリピンからの研修生・実習生の受入れをやっている。

フィリピンという国が出稼ぎの国という面があり、彼らの気持ちとして日本語よりもお金というところがあって、せっかく須崎で尾中先生にも池先生にもお手伝いいただいて日本語サロンを立ち上げたが、残念ながらうちの実習生は余り出席してないようだ。実習生の中でももっと日本語に触れる機会があることを分かった人や、夜飲みに行くのが大好きな人は日本語の習得が早かったり、もともと語学に興味のある人子は習得が早かったりとむらがある。実習生を何人も見ていく中で、日本語のコミュニケーションの不足がトラブルの元というのがあるので、我々としても言葉の重要性を教えつつ、そして地域の方にも

技能実習生という人たちがいて、我々日本人の生活を大きく陰で支えてくれているんだというのを、お互いが理解を進めればもっといい感じになるんじゃないかなと思っている。

(市川委員)

漁業実習生に日本語を教えている。私がこの仕事に関わるなかで一番大きく印象に残った事件として、漁業実習生が高知県のある町で1年半ぐらい前に不審者として通報されるということがあり、それは、私の担当した学生だった。彼からそのいきさつを聞いたり気持ちを聞いたりということができたが、彼は動揺もしていたし、涙も流していた。それから、自分に起きたことがまだ余り理解できてないというような状態だった。ただ、警察とか学校が子供に通学途中に何かあったときには先生に言ってねというふうに話すシステムを作るということも理解はできる。なのに、一方で泣いている人がいると。どこにも悪い人がいないのに、どうしてこういう状態が起きてしまうんだろうというのがすごく私の中にあり、今後は教育だけではいけないな、彼らのすばらしさとか良さを閉じられたところじゃなくて、もっと日本の社会に伝えていく役割が教師にも求められるんじゃないかというふうに感じるようになった。

(寄本委員)

私どもは土佐市と須崎市に学校があるが、地域の小学生、中学生との交流により地域とも交わることによって、日本人も留学生もお互いを知ることができる。またそのコミュニケーションの方法としてはやはり言葉が大事ということで学習意欲が高まって勉強に取り組む、といったところが見てとれる。学校としても初級レベルの日本語教育からN1レベルの全てのレベルに合わせて、また、いろんな日本語の特色の教育ができるようになってきたと思っている。

留学生といっても、私たちの中では須崎市民であり、土佐市民であり、高知県民であるというようなことで、外国人、日本人関係なく取り組んでいこうという思いでアットホームな気持ちで取り組んでいる。そして、その気持ちが留学生の中で評判になって、親戚又は子供さんというような方からの留学生が増えているというのが有り難い。これから私たちの学校で勉強した、高知をよく知ってる親となったその子供たちがまた高知に帰ってきて、日本の文化、日本語を学びながら、また日本に貢献できるように頑張ってもらえたらなというふうに思っている。

(折田委員)

元小学校の教員をしており、その中で21年間、中国残留孤児の関係のお子さんなどに対して日本語教育を担当してきた。日本語と学力をつけていくのは日本語教室の第一の仕事であるが、それと同じように周りの子供たちの受け入れる心を育て支持的な環境をつくっていくということがとても大事なことに実感している。

現在は高知市教育研究所で週1回、日本語ゼロの子供さんには日本語、そして、何年か日本で暮らしているお子さんには国語、社会、それから数学、算数を教えている。小・中学生、それから希望の卒業生の高校生が通ってきている。学校に通ってても先生方は学校の仕事で大変なので、やはり授業中に一人の子を見るとか放課後見るとかいう時間はなかなかない。だから、やっぱりこういう日本語教室にやってくる。

今高知市の状況としては、市内の学校に在籍する外国人児童生徒に対する日本語教育は、高知市の帰国・外国人児童生徒支援員という人が一人だけいて、外国人の児童生徒が在籍する学校を巡回指導している。だから、帰ってきたばかりのお子さんについては、毎日日本語指導をやりたいけど、四、五校を回るのでとても毎日に行けない状況。

中学校に編入してきたお子さんも高校へ行きたいという希望があるが、入学試験に合格するほどの学力はなかなかつかない。入学試験を受ける際に何か特別な措置をしていただきたいが今の段階ではそういうのがない。他県ではそういう実施もされてるということなので、ぜひ、高校生にもそういう支援をしていただければと思っている。そして、子どもたちが散在化している現在、子供たちに十分な日本語教育ができるように、やはり指導員それから教員の確保をしていただきたいし、受け入れる先生方も外国人をどういうふうを受け入れたらいいかと分からないでいることも問題だと思っている。

(北古味委員)

今実際に龍馬学園に来ている留学生でいうと、就労目的、日本で働きたい、日本で住みたいという目的を持った留学生が来ているのが現状。

ずっと長年やってらっしゃる方々とは違う目線で、側面から日本語教育というものを見ると、様々なコンテンツが日本語教育にはクロス的なものじゃないかなと。スポーツ、例えばプロ野球選手になりたいから日本に来て日本語を学びたいとか、日本語を学ぶ目的というものが非常に重要であると感じている。なので、今、入国してくる前から日本で何の仕事がしたいのかという、キャリア教育というのがすごく必要だと思っている。首都圏では、学校に所属し日本語を学ぶ一方で、アルバイトで収入を得て仕送りを送っている、出稼ぎ留学生というのがあるが、こういった方は高知県、龍馬学園には一人もいない。なぜならば、24時間365日、留学生のフルサポートをしている。現在、がんと闘っているネパールの留学生がおり、まだ治療の真ただ中だが、その彼、ネパールの子たちも高知県の一員だということで、多くの企業さんにもフォローしていただいている。先ほどの市川さんのお話にあったあの事件が起こったときにも、非常に感じるものがあつた。外国人の方々に首都圏ではなくて、高知県を選んでもらえるような地域づくりというのは非常に大切なもの。

新たな取組は、先ほど中央会の古木さんがおっしゃった、ICT等を活用してオンラインでの日本語教室。ベトナムやアフリカのチュニジアなどに対して、高知県にいながらやり方一つでそういった日本語教育の提供をできるということを学んだ。

(勝賀瀬委員)

協会では、大きく二つの取組を進めている。一つは日本語教室の開催、もう一つが日本語教室の空白地域での教室の開設に向けた取組。

一つ目の外国人のための日本語教室は5つのコースに、50～80人の方に参加をいただいている。ただ、高知市以外の外国人の方からもアクセスしやすい、身近な地域での教室の運営というものが必要だと思っている。

こうした考え方から二つ目の、日本語教室の空白地域における教室の開設に向けて取組を進めてきた。県内には、ほんの数年前まで日本語教室が開催されていたのは、高知市、南国市を始めごく一部だった。そのため、前向きに取り組んでいこうという市町村には、開設に向けて本日も出席の先生方のお力をいただきながらサポートさせていただき、これまでに土佐市、須崎市、黒潮町で新しい教室が立ち上がっている。あわせて今年の3月からは、オンラインでのクラスを3クラススタートさせた。

今後、高知県内における日本語教育を充実していくという点では、正にいろんな関係者の方々が一つの戦略、計画の下にベクトルを合わせて取り組んでいくということが大変重要になってくる。日本語教室は単なる学びの場ではなくて地域住民の方と外国人の方の交流の場でもあり、行政が外国人の方とつながっていく貴重な機会でもある。日頃からこうした日本語教室等を通じて外国人の方々とつながりを持つことは、いざ、大規模災害といったようなときにも大変に意味のあるものになってくる。そうした意味も含め、外国人の皆様が一番身近な市町村が中心となって関係機関がしっかりと力を合わせて、日本語教育を行っていくことが重要だと考える。

(今井委員)

南国市国際交流協会の主たる活動は、毎週水曜日に行っている日本語教室。受講者は、以前は高知大学の農学部の学生やその家族、ALT、日本人配偶者たちだったが、今は実習生が主。

現在、東部では南国市くらいしか日本語教室がない状況なので、西部のほうは去年度随分増えたが、東部でももっと各地で教室が行われるようになればいいと希望している。

これらの教室は、やはり地域住民と外国の出身の方々とをつなぐ場として私たちは考えている。そして、教室が一番の出発点となって、いろいろな事業を行ってきた。コロナ禍や会員の高齢化などの問題も抱えてはいるが、私たちなりのやり方で私たちのスローガンである「共にくらし共にまなぼう」の言葉の下に、南国市や高知県の力を借りながら、これからも活動を続けていきたいと考えている。

(尾中委員)

日本語サロンは、無料でどなたでも参加できる。メインは、土曜日の午後のボランティアでの日本語学習支援、それから、木曜日に県国際交流協会の委託を受けて、日本語教室をやっている。木曜日のほうは、申込制で順番にテキストを進めていく形だが、日本語サロンのほうは予約不要、誰でも来たい方が参加できるので、来た方にあわせてボランティアがいろいろ考えて対応しなくちゃいけない。

こういうボランティア活動は、プロでもない方が準備なしに日本語を教えることを要求されているので、そこを何とかしないといけないと思う。メンバーの中でも熱心な方は、有資格者としての日本語教育能力検定試験の勉強をしたり、勉強会を開いたりしている。ただ、ボランティアで外国人の方といろいろ交流をしたい、楽しみたいという目的を持って入られる方もおり、二つの道があると思うので、いろいろな方に興味を持って入っていただくというのが第一だと思っている。

県国際交流協会の主催でボランティア養成講座というのをやらせていただいている。養成講座をやった直後は、モチベーションが高まっているので熱心に通ってきてくれるが、交通費や駐車場が自己負担なので、足が遠のく方もいる。また、せっかく勉強して教育能力検定試験に合格しても、それを生かす場所が高知市にはないので、県外で就職してしまうこともあり、これも問題かなと思っている。

土佐市、須崎市、黒潮町でも養成講座をして、今3か所で日本語ボランティアの連携が進んでいる。有り難いことに土佐市と須崎市も市からの援助があり、それから黒潮町は町が主催で日本語教室をおこなっている。ボランティア活動をやりたい人がいても、やっぱりそういう自治体のサポートがあるとうまくいくし、自分たちだけだと途中で燃料切れとなりやすい。自治体からのサポートがなくて、養成講座をやっただけで終わった地域もある。高知市も外国人の方が多いが、日本語教室をやってるのが県国際交流協会の場所だけなので、もう少しいろんな所でできればボランティアも通いやすいと思っている。

(アディ・ケルタ・ラハユ委員)

国際交流という仕事と外国人の立場から見る日本語について話したいと思う。

高知市とインドネシアのスラバヤ市が姉妹都市の関係を結んでおり、私はその姉妹都市関係の仕事や翻訳、通訳の仕事、小中高校での異文化理解講座などをしている。

市川先生が話していた外国人が通報されたあの事件、そのときは私もびっくりした。見た目が違うので、本当に知らないと思われだと思われるのかもしれない。そのときは、数か月後にインドネシアとベトナムの技能実習生と一緒に、異文化理解講座の形で地域の学生さんと交流をし、お互いの理解を深めた。

高知県にいるインドネシア人はインドネシア人会という会があって、技能実習生たちも一緒に交流して、その場で困ってることなどを相談できる。例えば高知に来て土佐弁を使ってる方が多いので、それは困っている人が多い。ほかは年配の方が多く、しゃべるときに速すぎて聞き取れないという人も多い。

(吉野委員)

市長会は、高知県内 11 の市の市町村が集まって、会議を春と秋の 2 回にやる。各地域に在住する外国人の方への日本語交流教育の推進に関する事項は、残念ながらまだ挙がってきてない状況。

(笹岡委員)

町村会は、県内 23 の町村の首長、町村長の集まり。その事務局長をしているが、他に町村の議会、議長さんの集まりの議長の事務局長もしている。

高知県内に約 5,000 人の外国人の方々が在住、在留しているということで、日本語教育については県と足並みをそろえて町村も取り組む必要がある。ここで議論されたことを町村のほうに伝えることだけではなく、実際に町村の集まりの会で県から日本語教育に関する基本計画や実施計画を説明していただき、町村に働きかけていただくための場の設定もできる。この取組がぜひとも高知県ならではの取組になって、外国人の方々が高知で暮らしていきたいというようなことが、県と市町村が一緒になってできるような取組になるようにご協力したい。

○質疑、意見交換

(今井委員)

日本語教室を長年続けているものの意見として、実習生たちが日本語教室に定期的に参加するためには、やはりその監理団体や雇用主、受入れの農家さんなどのサポートが非常に重要。だからその辺りをもっと理解していただいて、勉強したいという人たちに手を差し伸べていくような方向でいけるといいと強く思っている。

(吉川委員)

毎週金曜日に須崎で日本語サロンがあるので、フェイスブックで毎回アナウンスするが、皆さん残業したいあるいはバスケット行きたいなどとなる。もっとプッシュはしていきたいとは思っている。

中には、年賀状を私たち事務所のほうに送ってきてくれて、これはどこで教えてもらったのと聞くとサロンでこういうこと教えてもらったとか、別の子は農家さんに教えてもらったとか。農家さんももっと日本語で話してほしいという願いがあるので、「今日サロンあるので早く帰っていいよ」と押してくれればいいが、仕事のほうがメインだということもある。そこは私どものほうでも、今日はサロンがある日なのでという感じでお知らせしていけたらと思う。

(中川会長)

通いやすさも必要だし、本人のモチベーションどう上げるかとか雇用主さんがどう理解するか、いろいろな課題が見えてきたと思う。

(市川委員)

私も自分の町に住んでいるある国の実習生に、オンライン日本語教室への参加を呼びかけたことがある。その方の休みも確認して、この日だったらこの時間オンラインであるよというふうに言ったが、それでも「ありがたいが、やはり休養を優先したい」と丁寧に断りの返事があった。

レベルもぴったり、日時もぴったり、オンラインなので交通もクリアしてるという状況でも来ない人がいるということ、どう捉えたらいいのかなと思って。幾ら周りがこういうふうにあなたのために合わせたよというふうにしても、来なければそこで余計な亀裂が広がってしまうという危険性もあるというふうに思った。逆に日本語の現場の人間が他にできることは何かと考えたら、例えばこれも船主さんや農家さんへのお願いになるが、現場でどんな日本語が使われているか。指示の言葉とか、専門の農業、漁業の用語などを調査させていただき、それを教室でやりますとか、そういうアイデアはある。

(中川会長)

仕事場に入っただけの教育というようなことも、アイデアとしてはあるということ。

(北古味委員)

最近、新たな取組で、テキストから離れた場所で、着物コンテストに参加するということを前提に授業に取り入れた。何が起こったかという、アルバイトを自分で調整して2時間、3時間も練習する。着付けの先生は日本語の先生ではないので、先生の話していることを知りたい。日本語の授業中の質問がすごく増えた。

もう一つは、今がんで闘病中の留学生の応援団を立ち上げた。その団長さんが、新聞、テレビなどの取材を受ける際のスピーチや原稿を作るのに、「先生、教えて」という。外の人たちと外で何かをすることのために、日本語を学びたいという、本来、あるべき姿を目の当たりにした。このコロナで龍馬学園の留学生も今40名ほど待機してまして、入ってこれていない。一方で高知県に住まれている外国人の方で、ビジネス電話の取り方や、メールの書き方などビジネスで本当に使う日本語を知りたいという要望とかというのはあると思うので、そういうものを教えられる人たちという、日本語教師の方々のバンクみたいなものがどこかにあればマッチングができるのでは。日本語教師の雇用を埋めるような動きといったものも、そういったところに生まれてくるのではないかな。

(中川会長)

学びたい実習生には通いやすさを、雇用側の理解を得るためにはお仕事上の専門用語等を、そして勉強のモチベーションを上げるには我々日本人の楽しみの中に引き込むみたいな、そういうようなご意見をいただけたかなと思う。

(古木委員)

今井委員のほうから技能実習生に対して接点を広げていきたいという有り難いお話をいただいたので、中央会としても全力でお手伝いをしていきたい。ただ、技能実習制度は非常に複雑な制度であり、在留中も組合や監理団体などの企業のお世話になっている。そういう関係の中でのいるということをご理解いただきながら、何とか日本語教室にいざなえるような方向に持っていければなと思っている。

外国人労働者の3分の2が技能実習生なので、ここをなくして日本語教室の今後の在り方というのはあり得ないと思っている。当然、実習生を受け入れる立場のほうも歩み寄る必要があるが、日本語教室のほうからも歩み寄っていただいて、お互いが接点を見付けていくというのが今後大切なのかなと思っている。

外国人技能実習生は母国でも日本語を勉強し、入国後も勉強する。そうした中で日本語教師が活躍する場が、今後、間違いなく増えるので、上手に制度を理解して活用していくことで外国人の活躍と日本語教師の活躍の場が増えていくようにしていくことが会議の目的になったらいいのかなと思う。

中央会としては、今年から企業の職場内での日本語教育力の向上に注力していく予定。技能実習制度上、職場内に生活相談員を設置するようになっているので、そうした制度を活用して職場内で日本語教育をしっかりとしていけるような方向をお手伝いしたい。